

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	原 圭 寛
主 論 文 題 名： アメリカにおける初期近代大学の学士課程編成に対する 「イエール報告」の影響についての歴史研究				
(内容の要旨) 本論文は、アメリカにおける学士課程編成の歴史において、知識の獲得・蓄積と能力の育成の関係がどのように語られ、それが実際にどのようなカリキュラムとして現われ、現代にいたっているのかについて検討することを目的とした。その検討の材料として本論文では、1828年にイエール・カレッジから出版された <i>Reports on the Course of Instruction in Yale College</i> (通称「イエール報告」) が、その後のアメリカにおける最初期の近代大学とされる、コーネル大学およびジョンズ・ホプキンス大学の成立と、そこでの学士課程編成にどのような影響を与えたのか、という点を中心に検討を行った。 先行研究においてイエール報告は、19世紀前半のアメリカにおいて、古典的なカレッジ課程を時流に反して擁護した文書であるとも、むしろ当時のニーズに応じてそれまでのカレッジ課程に対して新たな意味づけを行った文章であるとも評されてきた。しかし通史上同報告は、その後のアメリカにおける小規模カレッジの隆盛に影響を与えるにとどまり、また同報告及びこれに依拠したカレッジ課程は、アメリカにおける近代大学の登場に際して様々な葛藤を引き起こしたとされてきた。この前提には、同報告において登場する「精神の陶冶」という概念が、能力心理学に基づく形式陶冶と同じものとして解釈され、これが知識の獲得・蓄積よりも重視されるべきとする解釈が存在した。 これに対して本論文では、(1) イエール報告のカリキュラムの枠組みは、その後のアメリカにおける近代大学の成立にどのような影響を与えたのか、という点を最終的な研究課題として設定し、この点を検討するために (2) イエール報告における精神の陶冶と装備の関係及びカレッジの位置づけの再検討、(3) イエール報告執筆までの時期に、イエールにおいてどのようなカリキュラム改革が進行していたのかについての検討、という2つの予備的研究課題を設定した。これら3つの研究課題に対して本論文では、(1) イエール報告における精神の陶冶という概念は、後の近代大学設立の基礎となり、特にカレッジの課程は近代大学の中心となる研究部門及び専門職養成の各部門、すなわち大学院課程 (postgraduate) の基礎として位置づいた、(2) イエール報告における精神の陶冶という概念は、精神の装備と対置されたものではなく、むしろ前者が後者を包含しており、そのうえでカレッジ課程を近代大学の基礎として位置づけようとしていた、(3) イ				

ェールにおいてはエズラ・スタイルズ学長期以来、カレッジの上位に神学・法学・医学の専門職養成課程設立を企図し、そのためにカレッジのカリキュラムを修正してきた、との仮説を提示した。そのうえで、ィェール、コーネル、ジョンズ・ホプキンスの3機関の、年次カタログや報告書等のカリキュラムに関する文書を基にその変化を追うカリキュラム史研究を主体としつつ、そのカリキュラム編成に携わった当時の学長や、これに影響を与えた教授らの文書を、その執筆者の出自、同一機関内でのそれまでの改革動向、社会背景等を基に改めて解釈していき、当時のカリキュラム編成の意図やそのモデルを探ることで、これらの検討を行った。

この検討のため、本論文は7章構成で執筆された。第一章では前史として、中世大学から17世紀アメリカまでの学士課程の変遷の概略を述べた。ここでは、能力心理学に基づく諸力の拡張、すなわち形式陶冶という考え方は近代の産物であり、中世においては形式か実質かの区分は無かった、という点を確認した。第二章及び第三章では、研究課題(3)について検討を進めた。第二章では、アメリカで初めて欧州型大学の移入を試みた計画である、スタイルズによる「大学計画」(1777)と、その後のスタイルズ学長期(1778-1795)のィェール・カレッジのカリキュラム改革を検討した。第三章では、スタイルズを継いだティモシー・ドワイト(学長在位1795-1817)とジェレミア・デイ(学長在位1817-1846)の学長在任中におけるカレッジ卒業生向けの医学、法学、神学の各専門職養成部門の設置と、これに伴うカレッジのカリキュラム改革について、年次カタログや両学長の論考などから検討した。これにより、ィェール報告執筆までに、ィェールにおけるカリキュラム改革では、結果的に形式陶冶と実質陶冶の考え方が、相互に対立しない形で併存していたことを確認したうえで、エズラ・スタイルズ学長期以来、カレッジの上位に神学・法学・医学の専門職養成課程設立を企図し、そのためにカレッジのカリキュラムを修正してきた、という点の立証を行った。第四章では、研究課題(2)について検討した。ここでは第二章・第三章で得た知見を基にィェール報告の本文を分析し、そのうえで、スタイルズの「大学計画」以来の一貫した方針のうえで同報告は、カレッジの目的として精神の陶冶と装備という2つの概念を提唱しつつ、後者を前者に包含させた、という点を立証した。加えて第五章では、ィェールで後に設立された哲学・技芸部門及びサイエンティフィック・スクールが、同報告との関係でどのように位置づけられるかを確認し、同報告がカレッジの課程を、専門職養成や同時期にドイツの大学で成立した「哲学部」の基礎として位置づけようとしていたという点を、法人理事会の議事録や年次カタログ、当時の学長の論考などを基に立証した。第六章・第七章では、研究課題(1)について検討した。ここではアメリカにおける研究大学の嚆矢とされるコーネル大学を第六章で、ジョンズ・ホプキンス大学を第七章で取り上げた。先行研究におい

て両大学は、イエールの古典語必修課程を否定したとされるが、コーネルの初代学長アンドリュー・D・ホワイト及びジョンズ・ホプキンスの初代学長ダニエル・C・ギルマンはともにイエールの卒業生であり、更に両者は同じ教室で学んでいた。そこで当時のカリキュラム、大学のカatalog、学長報告書等の資料を基に、イエール報告にみられる精神の陶冶概念は、後の近代大学設立の基礎となり、特にカレッジの課程は近代大学を中心となる研究部門及び専門職養成の各部門、すなわち大学院課程の基礎として位置づいたという点を立証した。

これらの立証により本論文では、イエール報告を19世紀中葉以降に出現した研究大学における学士課程カリキュラムの理論的基盤として定位し、アメリカにおけるカレッジ課程の歴史を書き換えることを試みた。